

雲雀 令和6年9月度特別作品

山に遊ぶ

雲雀

二〇代のころ同じ職場にいた人と今も交流が続いています。六十歳を迎えたころからは、健康を考え、近郊の一・二時間で登れる山に行くようになりまし。可憐な山野草を見つけて目を輝かせ、頂上からの眺めを堪能し、ハーモニカに合わせ歌をうたいました。そんな楽しい山登りも、コロナ禍と皆の体力の低下で中止になりましたが、今振り返ってみれば、この上もなく楽しい思い出となっています。どここの山のことだ、たのか、は、きりしませんが、その時々之感動や出来事を、この度、俳句に取り上げてみました。

ロープ持ち伝ふ崖道呼子鳥

山下り近づいてくる蛙の声

大空に彩雲を見て夏近し

草茂りこの道ずつと続きをり

励まされ進む一歩に岩鏡

青葉する土塁に立ちて風受くる

白南風や挨拶の声返りくる

夏木立続いて歌ふ声響く

帽子取り汗を拭ひて瀬戸望む

下山して靴脱ぐ横に夏薊

《作品鑑賞》

森口良樹

一句一句に山登りの楽しさ、季節の自然とのふれあい、発見を満喫された様子が見て取れます。句中の季語から、様々な山を、季節を、散策登頂された様子も伺われます。きっと、楽しい仲間と充実した時間を過ごされたのだと思います。

ロープ持ち伝ふ崖道呼子鳥

少し険しい山だったので、急な崖道もなんのその、郭公の鳴き声を耳にされて、しかし、呼子鳥という季語に驚か、はたまた杜鵑か、様々な声が入り混じって聞こえているかのようにも思われました。自然をきくと堪能されたのだと思います。

励まされ進む一歩に岩鏡

仲間との山登りのふれあいは、きっと楽しかったのでしょう。お互い励ましあって進む足元の岩鏡は、きっとひと時の安らぎをもたらしたに違いありません。山頂に上りついたら友人とのお昼には、チョコレートやお菓子を分け合い、眼下の景色に話が弾んだことでしょう。

白南風や挨拶の声返りくる

山登りの途中にすれ違う見知らぬ人々とのほんの挨拶も、たどり着く山頂までの距離や時間をおそらくお聞きになりながら目指されたのではないのでしょうか。季語の白南風に明るい仲間意識を感じさせ、返りくる声に山への情熱を感じさせます。

下山して靴脱ぐ横に夏薊

山登りを終え、帰宅し登山靴を脱ぐ横に置いた今日の成果は、夏薊だったので、鮮やかな夏薊の色彩に、今日の楽しかった思い出が俄かによみがえってきているのではないのでしょうか。楽しく山登りの句を鑑賞させて頂きました。